

平成23年度部会活動功労賞 (部会CT賞)

「部会CT賞表彰にあたって」(入谷英司 部会CT長)

部会制が導入されてからまだ10年足らずと、歴史は比較的新しいですが、現在、化学工学会の中で、部会の果たす役割は、ますます重要となっています。化学工学を専門分野毎に14の部会に分け、専門家集団としての部会が活発な活動を行い、化学工学会のアクティビティの源となり、様々な学会活動を支えています。秋季大会のシンポジウムをはじめ、国際会議やセミナー、講習会の開催など、多くの行事を通して、産学官の研究者・技術者の情報交換や教育の場が提供されています。これら部会の様々な活動は、部会員の皆様の努力に支えられているわけですが、とりわけ若手の方々の貢献は大きく、彼らが部会活動を事実上牽引していることによって、充実した部会活動が営まれているのが現状です。こうした努力に少しでも報いたいという趣旨で、昨年度より若手の方を対象に、部会CT賞が設けられました。

今回は2回目の表彰となりますが、部会活動の活性化に特に顕著な貢献のあった以下の方々の3名の方々を受賞者として選ぶことができました。受賞者の方々のこれまでの多大な貢献に感謝の意を表しますとともに、今後も部会や学会の活動に、ますますご支援いただきますよう、お願い申し上げます。

皆様の受賞を、心よりお祝い申し上げます。

1) 題目：「化学工学会エネルギー部会における国際会議運営と部会活動活性化への貢献」劉 醇一氏(エネルギー部会)

劉氏は、2004年に化学工学会に入会以来、エネルギー部会の会員として部会行事等に積極的に参加され、エネルギー部会の発展とその活動に大きな役割を果たしています。同氏の部会運営における主な活動としては、2007年京都にて開催された「International Symposium on Innovative Materials for Processes in Energy System: IMPRES2007 (革新的エネルギー材料のための国際シンポジウム)」の企画運営、2009年からの2年間は会員数500人を超えるエネルギー部会の庶務幹事として、秋季大会におけるシンポジウムの運営の他、部会活動の庶務全般を務められ、また、エネルギー部会として出版した「骨太のエネルギーロードマップ初版および2」の執筆、関連セミナーの運営、さらには、2011年からはエネルギー部会幹事(熱利用分科会担当)として、分科会活動の運営に積極的に参画されており、現在に至っています。

同氏のエネルギー部会に対する詳細な貢献例を挙げる

と、エネルギー部会が精力的に研究を進めている分野である蓄熱・ヒートポンプシステム、燃料電池システム、新エネルギー技術等の基盤となる「材料」に特化した初めての国際会議であるIMPRES2007(2007年11月京都にて開催、11カ国から約130名が参加)において、同氏は実行委員会の庶務を担当され、海外招待者への対応、会議全体の会計作業、プロシーディングCD等の出版物の編集、会議当日の会場運営等を務められました。本会議は海外からの参加者からもユニークな国際会議であると高く評価されており、同氏による献身的な努力が会議を成功裏に収めたものと考えています。また、2009年4月から2010年3月までの2年間務められたエネルギー部会の庶務幹事としての在任期間におかれては、同期間内に開催された秋季大会におけるエネルギー部会が関与した計10件のシンポジウム全体に対して、シンポジウム論文集の編集、招待講演者に関する庶務、共催部会との調整等の他、一部のシンポジウムについては代表オーガナイザーとしてプログラム編成や招待講演者に対する庶務等を務めました。また、各分科会が関連したシンポジウム等においても、会計作業やメーリングリストを介した情報配信をするとともに、触媒学会等の他団体へもエネルギー部会の関連行事の宣伝を積極的に行い、化学工学会エネルギー部会の外部諸団体への広報活動にも御尽力されました。さらに、同氏は、「骨太のエネルギーロードマップ初版および2」の分担執筆や関連セミナーの運営等についても担当しました。

以上の理由により、同氏の「化学工学会エネルギー部会における国際会議運営と部会活動活性化への貢献」が部会CT賞の受賞にふさわしいと認められました。

2) 題目：「バイオ部会および関連国際会議のHP作成とその管理における顕著な貢献」滝口 昇氏(バイオ部会)

バイオ部会では、部会設立の当初から、バイオ部会員ならびに非会員への迅速な情報発信の場としてHP(ホームページ)を活用することを計画し、2002年に公開を完了しました。しかしながら、公開当初はHPの管理を外注していたこともあり、更新は年に数回程度に留まっており、迅速な情報発信という意味では不十分な状態にありました。また、HPの維持・更新経費も部会会計上、大きな負担となっていました。そこで、当初の目的である、バイオ部会内外へのタイムリーかつ十分な情報発信と、運営経費の圧縮のためには、部会内部に担当者を置くことしかないという結論になり、2004年7月、滝口氏(当時、広島大学助手、現在、金沢大学准教授)に、同HPの作成・管理を依頼することとなりました。

バイオ部会HPは、公開当初は掲載項目が限定されたものであり、必要最小限の情報発信をするのが精一杯の状態にありました。そこで、同氏は、同HPの管理・運営を任

されて以降、積極的に掲載項目を追加し、更新回数も増加させ、レイアウト変更により創意工夫を凝らした結果、掲載内容・項目が著しく増大し、現在では当時の3倍以上の規模と内容になっています。特に、過去の活動内容については出来るだけHPに整理して蓄積・閲覧可能とすることで、部会員が事後に遡って参照することができるだけでなく、外部の非会員がバイオ部会に興味を持ったときに、その内容について理解する助けとなるように様々な工夫をしています。例えば、部会員に配布されているNewsletterや生物情報分野専門分科会発行のソフトウェアバイオロジーの各号の目次を掲載する事も、部会員増強の一助となっていると考えています。また、2006年12月の化学工学会共用サーバーへの移転作業や、2008年9月の本部ホームページのリニューアルに伴う部会ホームページの見直し作業(2008年12月完了)の際にも、同氏の献身的かつ精力的に努力がなければ、現在のHPの機能を維持することできなかったと考えています。

加えて、2009年11月に本バイオ部会が主導して神戸で開催した国際学会 APBioChEC2009 (2年に一度開催される生物化学工学分野のアジア最大の国際会議)のHPの立ち上げ・管理運営を一手に引き受け、2008年8月のHP公開以降、高頻度の更新による情報提供を行う事で、同会議の成功にも多大な貢献したものと考えています。

現在、バイオ部会のHPは、年間に約3000回の閲覧回数があり、Google、Bing (マイクロソフトの検索エンジン)、Yahoo! Japanといった各種サーチエンジンにおいて、「バイオ部会」を検索語とした検索を行った際に化学工学会のバイオ部会HPが1番目に表示されるようになっており、これは候補者の貢献によるものが大きいと推察しています。また、国際会議 APBioChEC2009では、500名を超える参加者、特に300名近い海外からの参加者に対して、英文のHPを作成してタイムリーに情報を提供することによって、大きな混乱もなく、高い評価を得ることができたものと考えています。また、その運営を専門業者に委託しなかったことは、学会運営に財政面でも寄与したものと考えています。一般に、学会の部会活動は、短期的なアイデアや発案で運営されがちで、過去の経緯を知るシニア会員と若手の間で運営上の齟齬が生じることがあることは否定できません。そのような観点からは、活動の記録や履歴を残して会員に周知して行くことが望ましく、バイオ部会のHPは、情報発信だけでなく、活動記録を残すという意味でも意義深いものと考えています。

同氏はHPやWEBの専門家ではなく、研究分野に関連性がある訳でもありません。ボランティアとして、バイオ部会HPの維持・管理・運営に創意工夫を凝らし、長年に渡ってその活動を支えてきました。

以上の理由により、同氏の「化学工学会エネルギー部会における国際会議運営と部会活動活性化への貢献」が部会CT賞の受賞にふさわしいと認められました。

3) 題目:「化学工学会分離プロセス部会の運営への貢献」

松田圭悟氏(分離プロセス部会)

松田氏は、平成21年度から2年間、部会会員数500名を超える分離プロセス部会の庶務幹事を務め、部会の会員増強、国際会議、その他部会活動の活性化に関して多大な貢献をされてきました。

同氏は、上記のように、平成21年度より2年間、分離プロセス部会事務局と庶務幹事を兼任し、部会運営に多大な貢献をしました。さらに、蒸留分科会においても事務局と庶務を兼任し、部会の5つの柱である分科会活動に対しても、部会運営と同時に大きな貢献をしております。webやメールをベースに、部会会員増強にも努め、同氏が庶務幹事を担当した2009年4月には部会の会員数は561名でしたが、2010年1月には、最大616名となりました。

部会運営では、小菅人慈前部会長(日本リファイン)をサポートし、円滑な運営を進めました。多くの会員を抱える部会の庶務幹事でしたが、数多くの案件に対して、非常に迅速にかつ丁寧に対応している点で定評がありました。その結果の一つとして、同氏が庶務幹事の間に、分離プロセス部会にて、技術賞2件、技術奨励賞1件、国際功労賞1件の受賞しております。さらに、部会運営のシステム化に取り組み、これまで、紙ベース、メールベースなど、様々な媒体でばらばらに保存されていた部会情報の電子化を行いました。この業績は、平成22年度に松山秀人現部会長(神戸大学)の体制になった時に、部会の業務継続作業を、非常に円滑に進める上で有効に機能しました。そして、これは今後の部会運営に対しても、役に立つ仕組みとなっています。

部会を通じた学会活動への貢献として、第41回秋季大会では分離プロセス部会シンポジウム、分離プロセス部会ポスターセッション、実用分離技術ポスターセッションのオーガナイザーも務めております。この時の学生審査において、審査方法の厳格化に取り組み、公平かつ透明性のある審査方法を提案・運営しました。また、第41回秋季大会から、分離プロセス部会シンポジウムとして蒸留関連シンポジウムを継続的に企画しております。ここから派生して、部会・分科会の協賛行事として、内部熱交換型蒸留塔(HIDiC)シンポジウム(国内行事)を企画・立案し、運営を行っています。

国際会議として、化学工学会の協賛にて、2008年に軽井沢で開催された8th International Conference on Separation Science and Technology (ICSST08)にて、小菅人慈前部会長の下でOrganization Chairとして「Distillation and Adsorption」セッションの企画・運営を行い、座長や発表も含め、国際



(左から、松田圭悟 氏、滝口 昇 氏、入谷英司 部会CT長、劉 醇一 氏)

会議開催に貢献しました。また、日米の蒸留研究交流のために、分離プロセス部会蒸留分科会から AIChE meeting に継続的に参加しています。2008 年の AIChE Annual Meeting において招待講演も行っています。2009 年に開催されました 8th World Congress of Chemical Engineering (WCCES) にて、シンポジウム「Energy Saving Distillation Technologies For Prevention Against Global Warming」の Scientific Committee

としての貢献もあります。

この様に、分離プロセス部会の、部会の会員増強、国際会議、その他部会活動の活性化に対して継続的に大きな貢献をしました。

以上の理由により、同氏の「化学工学会エネルギー部会における国際会議運営と部会活動活性化への貢献」が部会 CT 賞の受賞にふさわしいと認められました。